



こと!こと?フォーラム

cell★

ケア × アート

で 幸せなまちづくり

「こと!こと?かわさき」をはじめよう



「こと!こと?かわさき」は、川崎のまち全体をフィールドとし、アート(文化芸術)を介して、人と人、人と場所、人とモノの間に「こと」を生み出し、人々がつながり合う「アートコミュニティ」を育むプロジェクトです。川崎市が取り組む「アート・フォー・オール」の一環として、川崎市と東京藝術大学が連携して取り組みます。

プロジェクトの出発点として開催するこのフォーラムでは、市内で開催されている「暮らしの保健室」や「社会的処方」の事例、東京藝術大学がこれまで手掛けてきたアートコミュニケーションの実践例から、ケアとアートの領域がかけ合わさって作り出される、誰もが社会とのつながりを持ち、自分らしくいきいきと暮らせる地域社会、ウェルビーイングなまちのあり方を捉えます。「こと!こと?かわさき」が目指す「対話のある社会」、「多様性が尊重される社会」、「孤立しない社会」の実現に向け、はじまりの一步を一緒に考えていきたいと思ひます。

2023年

12/17(日)
13:00~15:30

会場：川崎市総合自治会館ホール
定員：120名(参加無料/事前申込制/先着順)
手話通訳あり ※定員になり次第締め切ります

主催：川崎市・東京藝術大学
共催：共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点
企画・運営：アートコミュニティ形成プロジェクト「こと!こと?かわさき」

参加申込方法



申し込みフォームURL/
QRからお申し込みください。

<https://forms.gle/Q9hUb6orc28zU8qN7>

登壇者紹介



伊藤達矢

Tatsuya Ito

東京藝術大学 社会連携センター
特任教授 / 「共生社会をつくる
アートコミュニケーション共創拠点」
プロジェクトリーダー



西智弘

Tamohiro Nishi

一般社団法人プラスケア代表理事/
川崎市立井田病院腫瘍内科医師



近藤乃梨子

Noriko Kondo

こと!こと?かわさき
プロジェクトマネージャー



玉置真

Makoto Tamaoki

こと!こと?かわさき
プロジェクトマネージャー



中村茂

Shigeru Nakamura

川崎市市民文化局長

アートコミュニケーター「ことラー」30名募集!!

こと!こと?かわさきの活動の主体となるアートコミュニケーター(愛称「ことラー」)を募集します。ことラーは、集い、学び合い、対話をしながら、川崎市内の文化芸術資源を活かして“こと”を起こし、人・モノ・コト等をつないでいく人々です。ことラーの活動は、プロジェクトチームがサポートします。応募条件などの詳細はプロジェクトウェブサイト(<https://kotokoto-kawasaki.com>)をご覧ください。

ウェブサイト



応募受付期間

2023年12月17日(日)~2024年2月2日(金) 消印有効

アートコミュニティ形成プロジェクト「こと!こと?かわさき」について

川崎市内の文化芸術資源を活用し、文化施設だけでなく福祉や医療の現場とも連携して、アートを介したコミュニケーションを創出します。また、新たなミュージアムの開設を見据えて、市民がまちの中で文化芸術を共有しあい、ともに未来を描けるコミュニティを育みます。

プロジェクトの主体となるアートコミュニケーター(愛称「ことラー」)は広く市民から募集します。様々な背景や興味関心を持つ人々が集い、対話を重ねることから活動が始まります。

ことラーとしての3年間の活動を終えた後は、プロジェクトの外へコミュニティの輪を広げ、市内各所で「アートで人々がつながっているまち」を創出していくことを期待しています。緩やかにつながり合うアートコミュニケーターの活動やネットワークが、人々と社会を結び、「対話のある社会」、「多様性が尊重される社会」、「孤立しない社会」を実現します。

川崎市の目指す「アート・フォー・オール」

川崎市では、誰もが文化芸術に触れ、参加できる環境「アート・フォー・オール」の実現に向けた取組を進めています。市内の文化資源を活用して、文化芸術を身近に感じることが出来るまちを目指しています。この実現のために、東京藝術大学を中核とする産学官共創プロジェクト「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」に参画し協働しています。

東京藝術大学を中核とする 共生社会をつくる アートコミュニケーション共創拠点

文化芸術機関、企業や医療福祉機関などが連携し、アート・福祉・医療・テクノロジーの分野の壁を超えて協働的に研究しつつ、人々の間につながりをつくる文化活動「文化的処方」を開発し、社会への実装を試みます。アートコミュニケーションの特性を活かして、人々が社会に参加していく新しい回路をつくり、誰もが超高齢社会で「自分らしく」いられる、誰も取り残さない共生社会の実現を目指していきます。

